

新聞を教育に活用する(NIE)指導を児童・生徒の発達段階に基づき 小学校・中学校・高等学校で連携し大学教育へつなげる考え方

How to think the way to educate pupils and students smoothly with
newspapers(NIE) from primary schools to universities.

津吹 卓

Takashi TSUBUKI

要 旨

新聞を教育に活用する活動(NIE)は、小学校・中学校・高等学校それぞれで広がってきており、毎年全国大会も開かれている。各校種では、多様な工夫が行なわれ、定番と言われる展開方法から担当する生徒の状況に合わせたものまである。それ自体は良いのであるが、児童・生徒は小中高と連続して育っていくにもかかわらず、教員の方は自分の担当する校種以外の状況を把握していないことが多い。本来、小学校で育ってきた児童を中学で受け継いで伸ばし、高等学校でさらに発展した指導を行ない、大学につなげて一人前の社会人に育てることが重要である。

近年、小学校・中学校・高等学校の児童・生徒の発達段階に応じて指導しようとする試みが出てきており喜ばしいことであるがなかなか難しく、改善が試みられている状況である。

この論文では、発達段階における児童・生徒の状況、教科の例として理科における継続指導の状況を基に、NIEにおける継続指導の現状ととらえ方について考察した。

はじめに

NIE活動は小学校・中学校・高等学校(以下小中高と記載)でかなり広がってきており、各都道府県のNIE推進協議会が教員・新聞社を中心にリードしている。さらに高校に関しては、2004年に全国高等学校NIE研究会が発足し、毎年全国大会が開催され記念講演や公開授業、研究発表が行われ、一部大学教員も参加している。大学に関しては日本NIE学会が2005年に設立されてお

り、大学の研究者だけでなく小中高の教員も参加している。大学での課題設定力を培う指導が報告されており(高野, 2013)、筆者も同様の試みを展開している(津吹, 2010; 2013)。大学においては当然のことながら、学習や研究のテーマに基づいて自ら思考し、必要と思われる資料を探して読んで自分の考えを組み立て、展開することが必要である。これが本来の学びである。

そこにつながるように、小中高の流れの中で児

童・生徒を育てる必要がある。

しかし、小中高それぞれの校種でNIEを活用した授業は展開されているものの、なかなか校種を越え児童・生徒の発達段階に応じた試みはごく一部をのぞいて見られない。当然のことであるが、児童・生徒は各校種で学びながら小中高と段階を経て一つの流れに沿って成長していくのである。それに応じて、各校種の教員も児童・生徒の発達段階と、各校種で何をどのように体験し学んでいるのかを大枠で知っておく必要があるのではないだろうか。例えば中学の場合、小学校ではこのように学んできているから中学ではそれを受けてこう発展させよう、今後生徒たちは高校でさらにこう育って行くのだろうかと流れが何となくでも想像できることで、児童・生徒の成長の流れに、よりマッチした指導ができそうに思われる。

ただ、NIEは学校により、また教員により活用するかどうかが決まる。今回の新カリキュラムでは今までと異なり、教科書に新聞記事が多く使われることになっている。しかし、NIEのカリキュラム化はまだ現状を調査する段階である。また、カリキュラム化さえすればよいというものではなく、教員が何を目的として新聞をどう活用したいのか、目の前の児童・生徒に対してならどう展開するのが良いと考えるのが最も大事なことである。

NIEにおいては、児童・生徒の発達段階に伴う連携した指導を試みて、東京都NIE推進協議会は2010年度より、小中高での継続連帯発展に視点を置いた共同研究（先導試行研究）をスタートさせ（関口他、2010）現在に至っている。また、2013年の第18回NIE全国大会静岡大会では同様の主旨で「NIEのすそ野を広げるために」と題してパネルディスカッションが行なわれた。

一方で、一般の教科は、どのような状況であろうか。これがまた非常に難しい問題であり、小中高と校種ごとにそれぞれバラバラに教員が教えているのが実情であろう。

今まで何をどう習ってきたのかとか、卒業後何

をどう学んでいくのかを把握していない場合も多いのである。中高一貫校の場合は一人の教員が中高両方を教える場合も多く、中高両方のカリキュラムを知った上で教えられるので中高のつながりは比較的スムーズになる。また私学の場合、中学受験がある学校では、受験科目に関しては中高の教員が入試問題を作ることも多いので、小学校の教科書を見ざるを得ない。この結果、小学校の学ぶ内容を知ることができる。しかし、そのような場合は多くないのではないだろうか。

筆者は同じ学園の十文字中学・高等学校に35年間理科の教員として勤め、主に高校において個々の展開を長年続けてきたが（津吹、2009他）、東京都NIE推進協議会と関わるようになって小学校での展開を知り、小中高におけるNIEの展開全体をとらえ一般化と独自性および指導の目的と結果を区別して、NIEで何ができるのかを考えた（津吹、2011）。その後大学へ異動し授業でNIEを活用し、中高大をつないで発達段階に基づき何を指導するのかを考えた（津吹、2013）。また、児童教育学科であるために小学校と関わる機会も多く、小学生の様子について今新鮮な気持ちで観察している。また実習の巡回時には、校長や担当の教員による学生の指導を通して、学年の児童の特徴を学んでいる。

ここでは、小学生像を中高生の基準でとらえ、また中高生についてはこれまでの体験を通して最近の生徒について述べてみた。

この論文では、小中高とNIEの指導をどのようにつなぐことが可能なのかを考察するとともに、この可能性を広げるために、小中高の一部の校種しかご存じない先生方に、筆者の体験的な見方ではあるが、児童・生徒のおおよその発達の流れを知っていただくのが目的である。そのベースとして、小中高の児童・生徒の特性を確認するとともに、筆者が専門にしてきた理科・生物において小中高の児童・生徒に対してどのように考えると継続した指導が可能なのかを述べ、最後にNIE

における指導について述べる。

本文に先立ち、多くの資料をいただき先導試行研究等について御教示いただいた東京都NIE推進協議会事務局長の高橋通泰先生、先導試行研究の現状を教えていただいた全国高等学校NIE研究会会長で明治大学附属高等学校・中学校副校長の坂口泰通先生、そして2013年のNIE全国大会静岡大会シンポジウムの資料をお送りいただいた静岡市立高校教諭の實石克己先生に、心よりお礼申し上げます。

1. 発達段階に基づく学びの変化

今の児童・生徒は個人差も大きいですが、ここでは大きくとらえた一般論を述べてみた。

(1) 小学生

低学年の児童は、自由に勝手に、敢えて言うとは本能的に動く場合が多いと感じる。幼稚園実習の巡回で先生方に何うと幼児はそうであり、それをある程度認めつつ良い・悪いや、今は何をすべきかを話しながら指導をしていると何う場合が多かった。その状態から少し進んだのが低学年であり、生活の中である意味いろいろ教え込む必要がある。理屈よりもこうするのだと教えることが大事な時期である。そして学んだことを使って授業も含めた日々の生活をしながら、学んだことを身に付けていくのである。

1年生の場合、興味があれば人の話をしっかり聞くが、興味がなくなると気持は別の世界に行ってしまう、聞きなさいという指示は意味を持たない。自分の世界で生きているように感じられる。2年生になると人の話も聞ける児童も増え、内容を理解し行動に移せることも多くなる。しかし、内容や動きは自分の中で完結しているようで、話し合いまではいかない。

中学年になるとさらに理解は進み、話し合ったり一緒に行動したり協力して一つのことを行なうこともできるようになる。情報交換も可能である。言われたことを素直に聞かず、学んで身に着けた

ことを自分なりの方法で試してみる時期でもある。

高学年になると、自分で考え自分の意見も持ち、主張や議論をして話をまとめ結論を出すこともできるようになる。学校の中でも高学年として見られ、6年生は最上級生としていろいろな役目にも就くので、自分の立場を考え少し無理をしてでも頑張っているように見える。

(2) 中学生

1年生は小学校高学年と近いように思われる。6年生は立場上頑張ってきたが、中学では一番下の学年になるので、少し幼くなる場合もよくある。授業をしていると、精神年齢の幼い生徒は、無意識でいつの間にか自分の世界に入ってしまうことも起こる。まだ教員の指示に素直に従う生徒が多い。2年生になると、思考や組み立てができる生徒が増える。仲間と話し合って決めたり協力して仕事を進めることも上手くなるが、しっかりできる生徒と幼かったり考えず何となく過ごしている生徒との個人差が大きくなる。3年生になると成長の結果さらに個人差は開き、自ら思考・組み立てを進める生徒もいれば、考えることや体験の不足で思考・組み立てが苦手な生徒も出てしまう。ただ、指導次第で意欲を引き出せれば、自分の力を出して結構一生懸命に取り組む生徒は多い。

(3) 高校生

中学生と比較してさらに理屈が通る。また状況を見ながら、良きにつけ悪きにつけ、うまくやることもできる。かなり深い議論もでき、論理的な組み立ても可能である。大人とかなり近い対応ができる生徒もいる。高校生になるまでの成長にともない、中学生レベルから大学生レベルまでおり、個人差は大きい。

2. 教科における発達段階に基づく学びの連携—理科の場合

(1) 理科の立場から見た学校現場の現状

前述の通り、教科における小中高の指導の連携はできていないと言っても良いと思われる。時間

や意識の面で教員はどうしても自分の担当を教えることで精一杯であり、生徒が入学するまでにこれまで何を学んできたのか、また卒業後に今後何を学んでいくのかについては、良く分かっていないことも多い。だから生徒に教える場合、下手をすると木に竹を接ぐことが起こる。いい迷惑だが、生徒は現実に従うしかない。いや、生徒の方も過去に学んだことはすっかり忘れて、すべて新鮮な気持ちで（再度）学ぶ場合も多いかもしれない。しかしこれでは進歩が無い。ここには教え方や学び方の問題もあるであろう。

筆者は過去に生物で小中高大をつなぐ問題を取り上げ、2001年に十文字高校で開催された日本生物教育会全校大会東京大会で、研究協議の一つとして「子供の成長と生物教育：『生き物離れ』を考える」を企画・運営した。高校の生物教員の全国組織の大会であったので、幼小中の先生から現場の報告を發表していただくとともに、事前のアンケートとして小中高の教員39名に児童・生徒の生活体験、児童・生徒の興味・関心、実験・実習の変化（増減）を今と5年前で比較して尋ね、また中高生には生物に関係する生活体体験や中高生の意識に残っている小学校時の実習を答えてもらった。それらを基に自由討論をするとともに、群馬昆虫の森の矢島稔先生から助言者としてアドバイスをいただいた。結局は小中高を通じた教育がいろいろな面でうまくつながって生徒を育てることができておらず、家庭教育の影響も大きいという話であった。また、社会情勢や授業時間数の変化も大きく影響していた（津吹，2001）。このように教科の例としても、小中高をつなぐ教育は厳しい状況であった。その後、状況はさらに悪化していると筆者は考えている。生徒を見ていると、過去の「生き物離れ」どころかヒト自体が生き物ではなくなってきている状況が起きていると感じ、教科のレベルの話ではすまず、幼小中高を通じて生き物の素直な生き方を体感するとともに、生き物らしく生きることを児童・生徒そして教

員・保護者にも伝えていかななくてはいけないのではないかと考えている（津吹，2012）。

(2) 植物分野における小（低学年・中学年・高学年）・中・高のつながり

次に、理科の生物分野の植物関係を例にして、小中高をつなぐ流れを考えてみたい。これを示すのは、基本的にはNIEの場合も同じ発想でとらえることができると考えているからである。

1) 小学校

小学校低学年では理科が無く、社会科とあわせた生活科で植物分野を学ぶ。植物分野といっても、学校までの道や学校の周囲、校庭にある植物を眺めるところから始まる。生活の中で植物の存在を何となく意識するとともに、ミニトマトなどを育ててみたり、季節によって花を見たり秋に木の実や落ち葉で工作をしたりして、植物に親しむことを目的としている。導入の時期であるから理屈は語らずに、時間的なとらえ方をすれば点として植物の現象を単発的に見ているのである。（個々の事実・点としてのとらえ方）

中学年になると、種をまいて水をやると発芽し、成長すると花を咲かせ、さらにその後実ができて中に種ができるという事実を体験的に学ぶ。また、季節の変化にもなって、例えばサクラは春に花が咲き、その後芽が出てきて成長するので夏は枝も伸びて葉が茂り、秋には葉が紅葉して落葉し、冬には枝だけしかないように見える、つまり、成長や季節の移り変わりに伴う植物の変化を時間軸に沿って観察する。時間的なとらえ方としては線である。（時間的な流れの中での変化）

高学年になると、1度中学年で学んだ発芽の現象は、どのような条件のもとで起こるのか、花から実になるには何が起こるの必要がありその目的は何か、について実験を通して論理的に考えることになる。さらに中学年で植物を種から育てた経験を基に、なぜ植物が育つのかを植物の根・茎・葉の構造と働きを実験的に調べ、水の運搬・蒸散を学ぶとともに光合成の条件を確かめ、なにが起き

ているのかを論理的に理解する。（論理的な思考）

2) 中学校

中学では、小学校高学年で学んだ植物の構造と働きをさらに詳しく見て考える。この見方は主に個体としてのとらえ方である。根・茎・葉だけでなく花や実の構造も含めて特徴を学ぶとともに、目的として各部の働きをとらえ実験で確認し論理的に理解する。具体的には受粉・水の運搬・光合成・呼吸である。そしてそれらを総合的に組み立てて、植物がいかにかに生きているのかをとらえるのである。また、植物の種類も増やして特徴のあるグループの代表的な植物を観察し、最終的には種の特徴を基に分類につなげる。

次に細胞の立場で植物をとらえ、成長を細胞がいかにかに増えるのかを基に理解したり、種子がいかにかにできるのかを生殖細胞を基に受精として学ぶ。このように1つの視点はミクロな方向に移る。一方で、最後に生態系というとらえ方につなげて、光合成から生産者としての働きに発展させて、自然界での役割という大きな視点からも理解する。（細分化と総合化；細胞レベルのとらえ方）

3) 高等学校

新カリキュラムとして始まったばかりである必修の生物基礎は、これまでとは異なるとらえ方をしており、階層性と進化という見方で作られている。具体的なテーマは、ア. 生物の特徴、イ. 遺伝子とその働き、ウ. 生物の体内環境の維持、エ. 生物の多様性と生態系、である。ア・イ・ウでは生物の個体は出て来ない。体内の特徴や現象を遺伝子や物質でとらえる分子生物学が中心である。形態と機能を物質として論理的に理解し組み立てることで、生物がいかにかに生きているのかを理解する。エも生態系の多様性や変化・バランスといった視点で書かれている。すなわち、植物分野というものはなく、生物現象を見る中で、エネルギーという視点からは光合成が関係し、生態系の植生の部分では植物の問題となる。

4) まとめ

以上のように、学年や学校が上がる中で同じテーマが繰り返し出てくるが、視点やとらえ方が変化する。

①個々の事実→変化の流れ→総合的なとらえ方

②個々の体験→理論的な組み立て

③マクロな視点(個体)→ミクロな視点(細胞・分子)

児童・生徒の発達段階に合わせてカリキュラムは作られており、同じテーマでありながらループの階段を上がるように見方や思考も深くなる。当然のことだが、上に行くには下から上がらなければならない。いろいろな生活体験が無いと、理論的には理解できても実感がわかず自分との関係として実感を持って理解することはできないのである。

3. NIEにおける児童・生徒の発達段階に基づく学びの連携を試みた実践例

NIEにおいて、これまであった多くの実践発表のほとんどは、個々の具体的な指導に関するものであった（例えば田中他, 2012；矢内, 2012；久保, 2012）。それ自体は価値があるのだが、子どもが小中高と育つ観点で小中高をつなごうという発想はこれまで数えるほどしかない。以下に具体的に述べる。

(1) 東京都NIE推進協議会の先導試行研究

先導試行研究は、高等学校のNIEを長年けん引し、東京都NIE推進協議会の初代事務局長で、また全国高等学校NIE研究会を設立された初代会長で現在顧問の上原勉氏の発案で始まった。小中高をつなぐ試みとして、各校種の教員が協力し同じテーマで指導を展開する試みであり、この3年間展開されている。下記に具体的な内容の要約を示す。

1) ラジオ・テレビ欄（ラテ欄）の活用（小5・中1・高2）

小中高の共通理解として、教科・領域・目標はそれぞれの校種で決める、『ラテ欄』で読み取らせたい内容や方法は校種の発達段階を考慮して設

定し、結果として系統的な整理を目指すとする。

小学校では社会科5学年情報産業で取扱い（佐野・関口，2011）、「番組を見てもらうため放送局のしている工夫を考える」がめあてであった。例えばニュース番組に着目し、ラテ欄のニュース番組をマーカーで着色し、放送局の意図を考えた結果、放送局は見る人の生活時間帯・興味・流行など多くのことを考えて放送していると児童は結論づけた。担当者からは、ラテ欄と児童の生活経験が重なれば、ラテ欄は生活経験と現在の社会事象をつなぐ最適な教材等のコメントがあった。

中学校では1年の社会（地理）で取扱い（小出他，2011）、ラテ欄を活用してアメリカが世界をリードする大国であることを考察するためにアポロ11号月面着陸を例にアメリカの工業が世界に及ぼす影響力を知ることをねらいとした。1969年7月20（着陸当日）・21日（翌日）と探査機「はやぶさ」の帰還した翌日の新聞（2010年6月14日、イトカワも学ぶ）のラテ欄を見てアポロとイトカワ関係をマーカーで囲み、時間帯や量など報道のされ方を比較し、ねらいについて考えた。

高校では2年の特化教育（関口他、2011の中の坂口の部分）で扱い、各グループで起点を過去（あるいは未来）に求め、その時から10年後（前）、20年後（前）、30年後（前）と各年の1週間ずつをラテ欄について調査し読み取ることを行なった。各テーマは、終戦後の記事の変容・ドラマの家族構成・いくつかの出来事についての各時代における取り扱い方、であった。

坂口（関口他，2011）によると、小中高のとらえ方の根底にあるとらえ方は時間軸だという。小学生では授業当日の新聞から「今」を、中学生は今と過去と2点の比較を、高校生はあるテーマに基づきある時点から過去や未来へ10年ずつ広げたとらえ方だという。

2) NIEにおける『国際』関連記事の活用（小6・中1・高3）

共通理解は1)と同様である。小学校では6年

の社会科で扱った（片岡他，2012）。週に一度の朝15分の新聞タイムを4回使い、社会科にしばらく国際関係の読みやすい記事を選んでスクラップし、意見・感想を書いた。必ず地図帳で位置を確認させ、世界地図上での地域の意識も芽生えた。

中学では1年の社会科地理で取扱い、新聞を通して世界地理を学んだ（佐野，2012）。班で世界に関する記事を探し、見出しと国名、ジャンル（国内政治、経済等）をワークシートに記入、班でジャンルごとに色違いのシールを白地図に貼り、どの地域にどんな記事が多かったかを地図も見て考え特徴をまとめた。それを基に世界の事象の分布と日本の関係を考えた結果、生徒は世界の出来事や、教科書には無い新聞記事興味・関心を示した。

高校では3年の小論文で扱い、評価しながら読む能力を育てる小論文の指導（稲井，2011）で「批判的思考力」を育成した。生徒は体験もあり海外への関心は高かった。大学入試問題「侵略戦争における個人の善良性」と関連した特集記事を複数読み、主な問題・記事で明らかではないこと・情報としての信憑性・記事の文脈や立ち位置について考えさせた。その結果日本人のアジア軽視の傾向（自分も）が指摘され、畏敬や尊敬の念を持って異文化理解を深める必要性が提起された。

3) 新聞記事を使った交流学习の可能性（小4・中3・高2）（佐野他，2013）

共通理解は発達段階による記事の読解力の差を検証し、新聞記事を使った交流学习の基石を作ることであった。朝日新聞朝刊（2012.4.18付）の小6・中3の全国学力調査結果についての「生活への応用力重視 学力調査 正解複数の問題も」およびサイトと記事「理科好き育て 先生奮闘 身近なもので実験 生徒の驚き引き出す」の2つの記事を使用した。まず、小学4年の児童が2つの記事を読み、「理科離れについて」、理科離れの内容・この状況をどう考え、どんな対策が必要かに答え、次に中3と高2がそれぞれ小4の答を読んでアドバイスをした。しかし、記事の用語は小学

生には難しく、全文を理解できたのはごく一部であり、さらに理解できても知識や経験不足で漠然とした答になった。結果として、中学生からは「自分が理科好きになること」、高校生からは「理科離れの現状や対策を社会構造や文科省など関係機関の取り組みから客観的に述べる」解答となった。中学生は記事を自分の範囲で主観的に、高校生は社会の一員として社会問題として俯瞰的客観的に考えていると考察した。また、小学生の解答を中学生や高校生の解答と比較できなかったことを反省していた。

(2) NIE 全国大会でのパネルディスカッションの試み

第18回 NIE 全国大会静岡大会が2013年7月に開催された。第1日目には「NIE のすそ野を広げるために」と題してパネルディスカッションが行なわれた。主催者の意図としては小中高および家庭における NIE を結び付けようとする画期的な試みであるという意気込みを、日本プレスセンタービルでの東京 NIE 推進協議会主催の第6回（平成25年）関東甲信越静岡ブロックセミナーで伺った。パネラーは、児童生徒の立場から静岡市の小学校6年・同中学3年・静岡県立高校2年が各1人、教員の立場から小中の教員が各1人、家庭の立場から静岡市の前 PTA 連絡協議会会長がコーディネーターとして日本新聞協会アドバイザーで島田市の公立中学の校長が加わるということで、その意気込みを感じることができた。概要は静岡新聞朝刊（2013年7月26日）・読売新聞朝刊（2013年8月10日21面）に掲載された。

(3) 実践例をどのようにとらえるのか

実践例とも校種を越えて話し合い、新しい方向を探ろうと苦労されていることがよく分かる。それぞれの実践例は、「発達段階に基づく学びの連携」という条件を無理につけなければ、それぞれに素晴らしい展開である。

(1)を見ると、1)は確かに時間軸という点で見ると共通項ではあり、一つの考え方であろう。た

だ筆者から見ると、展開内容におけるつながりがもう一つ分かりにくいように感じる。ラテ欄という共通の教材を用いた工夫は素晴らしい発想だが、展開はそれぞれのように感じる。1)の①は公開授業であり、参加者からは次の意見もあったようである（佐野・関口，2010）。「テレビ放送におけるニーズのとらえ方は小学生ではこれくらいで、さらに深い考察は中高で取り組んだ方が良い」「テレビ欄の見方を学び、面の視点で『今』の社会を見た。中学校では歴史的な見方をしたい」。これらの意見も「発達段階に基づく学びの連携」を考える上でヒントになるのではないだろうか。

1) 2)の小中高の共通理解として、NIE であるから教科を決めないのも、領域がそれぞれなのも十分に理解できる。担当の先生の専門性もあるので、決めること自体難しいであろう。内容や方法も、当然発達段階を考慮して設定することになる。ただ、目標をそれぞれの校種で決めておいて、結果として系統的な整理を目指すことが可能なか疑問に感じる。NIE は自由に展開できることが特徴である。しかし今回の場合、自由だからこそ発達段階に応じてつないでいくことが逆に難しくなるということはないだろうか。

その点で3)は連携としての考え方は素直なものであったのではないだろうか。展開のねらいは小中高で共通認識を持っており、担当者の反省点はあったが、この形での発展が考えられる。連携として、例えば小中高でこの記事に対しての意見をそれぞれで書いた上で、小学生の意見を中学生が、中学生の意見を高校生が見てコメントを書き、高校生は小中高全体を見て成長に伴う理科に対する考え方の変化を学び考えることも良いのかもしれない。小学生が内容を理解しやすくすることも大事である。

(2)において、児童をパネリストに迎えたのは画期的なことであった。記事を読むと、児童・生徒は自分たちのことについて非常に立派に発言をしたようである。この試みは新しい発想であり、

大きな進歩である。ただ小中高をつなぐという観点から見ると今一つであり、やはり校種を越えた連携はなかなか難しいと感じた。

これらの企画・運営を有意義にするためには、校種の共通理念やつなぎの意識を何とか小中高で共有することが必要であるように思われる。次の項で考察を深めたい。

4. NIE における発達段階に基づく学びの連携をどのように考えたら良いのか

(1) 児童・生徒・学生の発達段階と学びの関係のとらえ方

児童・生徒の様子は、1. 発達段階に基づく学び方の変化、で述べた。それに伴う学びの変化を図1に示す。ここでは小中高に大を加えて考えてみた。

簡潔に述べると発達段階が小から大に向けて、大脳の働きが記憶中心から思考中心に移行し、思考自体も定型から独創に、具体的なものから抽象的なものに変化するのである。教育活動もこの変化にともなって変えていかないと精神年齢が発達しない。

(2) NIE に教科の「発達段階に基づく学びの連携」の考え方を導入する—1つの発想

視点はすでに、2の(2)植物分野における小(低学年・中学年・高学年)・中・高のつながり、で述べた。テーマや狙いを同じ方向を向けながら、発達段階にともなって質的に広さや深さが増せば

良いのだと考える。

そのために最も大事だと思われることは、教員同士がお互いに異校種を知り、とくに児童・生徒の発達段階の違いを体験的に学び合うことである。知識ではなく、具体的なイメージが湧かないと、教員同士が児童・生徒のことをお互いに考えて進めることができない。

このことはNIEだけでなく教育活動全般に対して言えることであり、異校種を知ることは大きなプラスの効果をもたらす。きっかけはクラブ活動でも交流会でも何でも良く、とにかく異校種の教員同士の交わりを進めたい。児童・生徒は小中高という一連の流れの中で育つのに、教員側が自分の担当の発達段階しか知らないのでは話にならないのではないか。しかし、そうは言ってもなかなかチャンスが無いために、その重要性は分かりにくい。筆者も中高に長年勤務し中高の流れは分かっていたが、大学の非常勤も同時に10年程勤めることで、さらに高3から大学への流れもつかめた。また地域ボランティアとして、地元の小学校で児童・教員の自然観察を6年間継続して指導したが高学年の様子は分かっていても低学年は児童に接してみてもなかなか様子をつかめなかった経験がある。前述の先導試行研究において2013年9月に、小学校2、4年でのNIEの授業を小学校だけでなく中高の教員も見学し話し合っており、大きな進歩で喜ばしいことである。

特徴 \ 校種	小(低学年)	小(中学年)	小(高学年)	中学生	高校生	大学生					
記憶の割合	多	←				少					
マニュアル使用の割合	多	←				少					
思考パターン	定型	←				オリジナル					
思考レベル	単純	←				複雑					
教育の質	教え込む	→	まねる	→	自分で使う	→	工夫	→	組立て	→	創造
NIE展開の次元	身近・具体的・表面的			←							広い・抽象的・深い

※学校差・個人差も認めた上での展開

※当然だが、発表自体が目的ではなく、展開したことで児童・生徒が何を学んだかが第一

図1：児童・生徒・学生の発達段階の変化

大げさにNIEと言わなくても、極端な場合小学1年生の場合生活科の中で、例えば新聞紙で飛行機を作ったり、5月の節句に新聞紙で兜を折ってみたりといった遊びから入るのも、発達段階にマッチした導入方法の1つになりうると考える。児童が先ず、生活の中で新聞の存在を知り、新聞に親しみを感じて初めて、記事の内容に関する活動が可能になるのではないだろうか。

1) 大きなテーマの設定方法

次の2つの方法が考えられる。

①テーマ→記事：初めは新聞記事ではなく小中高とつながるテーマから考え、次に相応しい記事とつなげる

②記事→テーマ：適切な記事からテーマを考え、発達段階に基づく発展の広がり構築する

2) 具体的なテーマの設定

①小中高の担当者が、自分の児童・生徒をイメージしながら、これなら児童・生徒が意欲的に楽しんで面白がると思うことを発想する

②小中高の個々のテーマが発展・広がりや深まりでつながることを意識する

③最後は小中高の教員間で各校種における児童・生徒に適したテーマをどのようにとらえるかを話し合い、相互に理解し合っつなげようとするのがカギとなる

3) テーマ例：社会現象・身近で新しいもの・（～をどうとらえるのか・～をどう考えるのか）

例1. 「いじめ法案可決」をきっかけに、いじめ関連の記事を用いて：小学校でのいじめ、中学校でのいじめ、高等学校でのいじめ（社会でのいじめ）を基に、いじめの質の違いを考え、そこから発達段階に基づく人間関係の複雑さと深さの変化を考察し、社会・人間生活・常識・文化の変化につなげる。これを児童・生徒の発達段階に応じて生活の中の自分の問題として考えさせる。いじめの要因が見えてきたら、どうすることでなくす方向に持っていけるのか、なくす方法はあるのか、個人と集団においてどう考えたら良いのかを各校

種のレベルに応じて話し合う。

例2. iPS細胞の臨床試験実用化に向けて：ノーベル賞受賞の話題も使って、まず小中高のレベルに応じて、iPS細胞とは何か、誰がいつ作ったのか、何のために作られたのかを知る。臓器移植との関係やメリット・デメリットを学ぶ。病気が治り寿命が延びることの意味と延命措置から、ヒトが生きることの意義を、QOL（quality of life）を自分や家族の立場に立て考える。

例3. ヒトに影響する環境とは何か：ヒトについての環境について、小中高それぞれのレベルに応じたとらえ方をする。自分を中心にして、まず自然環境について考え、次に社会環境としての家族・クラス・学校・地域社会と広げ、「自分が生きる」「仲間が生きる」「知らない人も生きる」ために良い社会を考える。いじめを考えることにもつながる（生活科・理科・社会科・保健体育科・家庭科・道徳から実生活、そしてヒトの生き方・生きる質へも発展する）。

思いつくままに例を述べたが、とくにテーマにはこだわる必要はない。ただ、いろいろな視点からとらえられる大きなものが良いのではないかと考える。その方が多様な発想や展開が可能となるからである。結局、小中高の流れが最終的に大学、そして社会で要求される「自ら課題意識を持ち、調べ、考え組み立てる総合力」の養成にスムーズにつながる事が大切である。

おわりに

最後に基本的なことを述べておきたい。NIEは児童・生徒にとってより良い授業や教育を展開する手段の一つとして、新聞を活用するというものである。けれども、新聞だけにこだわる必要はない。新聞がうまく役に立つときに新聞を使うわけであり、同時に新聞以外のものを使うことは発展に通じる。

一番大事な「児童・生徒にとってより良い授業・教育」を目指した新聞活用は、新聞を使おう

とする教員の発想力にかかっている。そしてその活動が単発のものではなく、発達段階に応じてレベルアップするようにつなげていくことで、児童・生徒もさらに伸びていくことができるであろう。しかし、どうせねばならぬと厳密にきちんと考えなければならぬものでもないと思われる。児童・生徒の発想力や思考力を育てる中で、自ら学んだり調べたり組み立てたりする力を身に付けるはずである。それを行なう中で伸びていってほしいと思う。教育とは、教員が教えることだけではない。教育の最終目標は自立なのである。

引用文献

- 稲井達也, 2012. 【先導試行研究実践報告】NIE で育てる国際理解—評価しながら読む能力を育てる小論文(高校3年)の指導—東京都NIE推進協議会研究報告書: 116-117.
- 片岡大昌・水元満哉・川崎由美子・山野辺愛子, 2012. 先導試行研究(小学校)NIEにおける『国際』関連記事活用の一考察—小学校社会科第6学年国際理解単元の学習を通して—東京都NIE推進協議会研究報告書: 110-111.
- 久保静生, 2012. NIEによるビジネス教育. 東京都NIE推進協議会研究報告書: 74-75.
- 小出峰仁・菊池秀平・安川礼子, 2011. NIE「先導試行研究」授業研究会学習指導案. 東京都NIE推進協議会研究報告書小学校編: s14-s19. (同様なものが中学校編・高等学校編にも掲載されている)
- 佐野一道・関口修司, 2011. 先導試行(小学校)NIEにおける『ラテ欄』活用の一考察—小学校社会科第5学年上場産業の学習を通して—東京都NIE推進協議会研究報告書小学校編: s4-s13. (同様なものが中学校編・高等学校編にも掲載されている)
- 佐野一道・安川礼子・坂口泰通, 2013. 先導試行研究新聞記事を使った交流学习の可能性—記事読解力の発達段階の考察とあわせて—東京都NIE推進協議会研究報告書: 114-119.
- 佐野貴宏, 2011. 先導試行(中学校)「新聞を通して世界地理を学ぶ」東京都NIE推進協議会研究報告書: 112-115.
- 関口修司・安川礼子・坂口泰通, 2010. 先導試行研究. 東京都NIE推進協議会研究報告書小学校編: s2-s3. (同様なものが中学校編・高等学校編にも掲載されている)
- 高野義雄, 2013. 「課題設定力」培う大学生. No.1815. 教育ルネッサンス 新聞で育てる5. 読売新聞 9月11日朝刊23面.
- 田中義順・北原武宏・菊池靖志, 2012. 学び合い 伝え合い 深め合い〜節電新聞を作ろう(5年・国語)〜. 東京都NIE推進協議会研究報告書: 14-17.
- 津吹卓, 2002. 子供の成長と生物教育:「生き物離れ」を考える—十文字高校で開催された2001年日本生物教育会全国大会東京大会より. 十文字中・高紀要24: 1-40.
- 津吹卓, 2009. 高等学校におけるNIEをどうとらえるのか. 十文字中・高紀要31: 38-47.
- 津吹卓, 2010. 新聞記事を基にした模擬授業は若い教員に「授業に大切なこと」を気づかせるために有効か—小学校の教員を目指す学生による理科の授業案創りと授業展開—十文字学園女子大学人間生活学部紀要8: 263-272.
- 津吹卓, 2011. NIEの理論:NIEで出来ることは何か—NIEも普通の授業と変わらない—全国高等学校NIE研究会第9回研究発表会全国大会プログラム・発表要旨集: 8-11.
- 津吹卓, 2012. 生き物から生徒の生き方を考える—チョウとガの形態の違いから生き方の違いへ, そして子ども・生徒の見方・とらえ方へ—. 十文字中・高紀要34: 7-13.
- 津吹卓, 2013. 中学・高校・大学をつなぐNIEとは—発達段階に基づいて何を指導するのか—全国高等学校NIE研究会第11回研究発表会全国大会プログラム・発表要旨集: 22-25.
- 矢内一弘, 2012. 社会科テストにおける時事問題の出し方. 東京都NIE推進協議会研究報告書: 52-53.